

き分け再試合はいまも記憶に残る名  
賞として語り継がれている。近年で  
は、2012年に伊万里農林と佐賀西  
延長十五回引き分け再試合を戦って  
る。

2007年に全国制覇した佐賀北  
宇治山田商(三重県)との2回戦  
延長十五回を戦い抜き、再試合を制  
して勢いに乗った。百崎敏克監督(当  
時は、タイブレーク導入について「引  
分け再試合を知る身からすると、積  
積的に賛成と言えない部分もあるが、  
時代の流れからすればやむを得ない。  
このチームも対策を講じていくしかな  
い」と語る。

夏の地方大会への導入についてはこ  
れから論議が本格化するが、県高野  
連は、各都道府県の高野連の裁量に  
任せられる場合、「一気に議論が加  
激するだろう」とみる。甲子園は選  
手たちにとって小さい頃から夢見る  
舞台。健康面の配慮はもちろん、勝  
負の公平性が保たれる制度にしてほ  
しい。

ットアウトするため、インターネ  
ットに対する取り締まりも強化さ  
れ、「防火牆」(ファイアウォール)が日ごとに「頑丈」になって  
いく。これら「セキュリティシ  
ステム」に膨大なお金がかかって  
いるという。「維穩費(安定維持  
費)」と呼ばれるお金だ。  
この単語を知ったのは、ソシ  
ヤルメディアを使ってインターネ  
ット上で中国高官の汚職の実態を  
暴露する、アメリカに逃亡中の中  
国人の富豪・郭文貴氏の口から  
だ。今年4月、郭氏が米政府系メ  
ディア、ボイス・オブ・アメリカ  
(VOA)の中国語放送のイン  
タビューを受けている最中に、放  
送が中断される事件があった。裏  
で中国の「維穩費」が動いたと  
うわさも…。

官僚の汚職や権力乱用などによ  
って高まる大衆の不平不満を抑  
制しようと、手足を縛ったり、耳  
目をふさいだりすることに巨額  
の国費を使うよりは、より健全な  
「法治社会」ないし「権力を監視  
できる政治システム」の建設に投  
入した方がよいのではないかと。  
(作家)

## 報道陣のチームワーク

本山 航大 スポーツ担当

「そこは水が来るから後ろに行つて  
！」。愛媛国体出張4日目、セーリン  
グ会場。40艇近いヨットが疾走する瀬  
戸内海で、約10人を乗せた報道用ボ  
ートが次のポイントへ向けて速度を上げ  
る。私はボートの前方にいた。激しい縦  
揺れで身動きできず、容赦ない水しぶ  
きに襲われていると、操縦士が声を張  
り上げた。そんなこと言われても…。  
この日は成年男子470級のレース  
最終日。朝から海は平らなままで、レ  
ースを始めては風が止まってやり直  
し。その繰り返しだった。しかし夕方  
になって吹き付けた強風により、レ  
ースは急展開で動き出す。取材艇は振り  
落とされそうになるほど揺れ、写真を  
撮って船着き場に戻るころには全員無  
言になっていた。

翌日、少年女子420級の最終日。  
取材艇のメンバーはほぼ同じ。コース  
のポイントへヨットの群れが押し寄せ  
ると、「佐賀来ましたよ佐賀」「そっ  
ちも」。乗り合わせた記者たちと結果  
していた。

二人組で戦った470級・420級  
の選手たちに負けないぐらいとは言わ  
ないが、取材艇に芽生えた即席のチ  
ームワークが国体初取材の私には何より  
心強かった。

記者  
日記

## 婚難の 中で 第5部

夢見る熟年①



働いてきた東京・新宿の街並みを見つめる鹿島泉＝7月

55歳で独身、東京都の食品  
関連企業で管理職を務める鹿  
島泉は今年、仕事を辞め専業  
主婦になる。間もなく地方に  
住む68歳の病院長と結婚。積  
み重ねたキャリアを捨てる。  
「仕事と妻の役目、両方でき  
るほど器用じゃない。彼のそ  
ばにいて、健康を気遣えたら」  
結婚は2度目だ。短大を卒  
業後、一度も働かずに20歳で  
最初の結婚をした。「結婚が  
何か全くわかってなかった。  
ウエディングドレスを着ると  
か、新婚旅行に行くぐらいの  
イメージ」  
価値観の違いから20歳で離  
婚。2人の子どもを育てるた  
め、懸命に働いた。気が付く  
と会社で責任ある立場になっ  
ていた。出合いがなかったわ  
けではない。しかし結婚は考

## 「彼は自分へのご褒美」

えられなかった。  
子どもたちが独立した時  
「この先ずっと一人かも」と  
不安がよぎった。そんな時、  
中高年の出会いの場作りに力  
を入れる結婚情報センター  
(東京)の広告が目に入った。  
軽い気持ちで登録。思うよう  
な人になかなか巡り合えな  
かったが、次第に本気モードに  
なり、婚活セミナーに足しげ  
く通った。  
同社社長の須野田珠美は、  
熟年での結婚について「若返

## キャリア捨てて専業主婦に

る、生活が楽しくなる、孤独  
死の不安がなくなる」などメ  
リットが多いと説明する。一  
方で財産の相続や介護問題も  
避けては通れない。  
泉がセミナーで学んだのは  
「同年代の男性が求めている  
のはかわいい女性」。そこで  
「互いを認め合い、素直に受  
け入れよう」と努力した。20  
人ほどとお見合いをした後、  
現れたのが彼だ。  
「体は大丈夫ですか？ あ  
まり無理しないで」。自分を  
気遣ってくれるメールを見る  
たび、幸せに包まれる。1人  
で気を張って生きていた時に

## 時言

## 解散権封印

いま一度、思い出していただきたい。  
「この選挙で国民の皆さんから信任を得  
て、力強い外交を進めていく。北朝鮮に対  
して、国際社会と共に毅然(きぜん)とし  
た対応を取る考えであります」  
安倍晋三首相は9月25日の記者会見でこ  
う述べた上で、直後の臨時国会冒頭で衆院  
を解散すると表明した。  
野党やメディアは、安倍首相が核・ミサ  
イル開発を加速させる北朝鮮を巡る情勢を  
「国難」と位置付けながら、総選挙という  
政治空白をつくることの矛盾を批判した。  
その批判に全面的に同意した上で、さら  
に指摘すべきことがある。それは安倍首相  
が国民から信任を得る方法は選挙しかない  
と考えている節がある点である。  
確かに選挙、特に衆院選は政権に対する  
国民の信任の度合いを測る機会である。し  
かし、これは多少の政治空白が生じても問  
題がない「平時の思考」と言える。国難と

呼ばなければならないような事態で、国民  
の信任を得る方法は別にある。  
それは国会、具体的には野党との連携で  
ある。仮に今回、安倍首相が「国難を乗り  
切るまで解散権を封印します」と宣言した  
上で、野党に協力を求めているら、どうな  
っていたか。  
解散権封印という極めて大きなリスクを  
負って事に当たろうとする安倍首相を世論  
は支持し、広範な信任を与えていたであ  
ろう。  
野党の混迷、準備不足の虚を突く不意打  
ち解散の結果、多数派を維持できたとして  
も、野党支持層の信任を得ることはできな  
い。言論の戦争と呼ばれる選挙は程度の差  
こそあれ分断を生むからだ。  
自ら解散権を封じた上で野党に協力を得  
る方法で得られる信任と、いずれが力強い  
ものであるかは火を見るよりも明らかだろ  
う。(柿)

この連載へのご意見、  
感想を共同通信「婚難  
の中で」取材班までお  
寄せください。ファクス  
03(6252)8745。電子メ  
ールはkurashi@kyodonews.jp  
です。